

西行も眺めた風景に会える

丘の中の小さな庵 いおり

まんだらじ しゅつしやかじ
曼荼羅寺と出釋迦寺を結ぶ道の中ほどから、火上山に向かう標識を目印にみかん畑を上っていくと、丘の中腹に、平安時代の歌人、西行の滞在した西行庵（山里庵）があります。

西行法師が四国を訪れたのは仁安2（1167）年、50歳の時でした。善通寺では玉泉院の久松庵とこの山里に庵を構えました。当時住んでいた小さなお堂は朽ち果ててしまいましたが、その後3回再建されました。最近では、昭和63（1988）年に吉原郷土研究会と地元住民有志により再建され、平成元（1989）年の西行800年忌とともに落成式を行いました。小さな石の橋を渡ると竹やぶの中に二間四方の小さな庵があります。傍らには西行法師の2つの歌碑と西行法師をしのぶ中河与一作の歌碑がひっそりと建っています。

さいぎょうほうし
西行法師

西行法師は平安時代末期から鎌倉時代初期の歌人で、「新古今和歌集」には94首もの歌が収められています。俗名は佐藤義清のりきよといい、平将門を討った藤原氏の子孫として富裕な武門の家に生まれ、若くして鳥羽院の北面の武士となりました。院に目をかけられますが、23歳で突然に出家します。しばらくは吉野山の麓などにも住み、のちに高野山に入山しました。

50歳の初めには、すくとじょうこう
崇徳上皇の墓参りと弘法大師空海の遺跡をたどり四国へ旅をします。そこで讃岐の地に入り、空海の御誕生所である善通寺のほど近くに庵を結びました。建久元（1190）年、享年73歳で亡くなりましたが、「願はくは花の下にて春死なん そのきさざぎの望月のころ」と詠んだ和歌のとおりで、藤原定家や慈円に崇敬されました。歌集に「山家集」があり、弟子が筆録した「西行上人談抄さいぎょうしょうにんだんしやう」も残されています。

「山里に人来る世とは思わねど
とはるることのうとくなり行く」



竹やぶの中にひっそりと建っています。



■吉原町三井之江
●出釋迦寺から徒歩約13分

いきのきだいまょうじん
生ノ木大明神

西行庵から東へ100mほど下ったところに、生ノ木大明神があります。座高30cmほどの衣冠束帯姿をした木造の公達座像が、祭神としてまつられています。この神像は、西行法師がこの地に来たときに背負っていた「背仏さん」だともいわれています。地元の人によって拝殿が建てられ、大切に守られてきました。



生ノ木大明神